

# 次代の社会を共に創る



# 次代の社会を共に創る

## 人材を根幹とする「共創経営」への挑戦

### 変化する市場 構造に既存の枠組みを越えた共創で応える



類設計室 取締役常務執行役員 大阪設計室長

麻丘 東出

時代はいま、これまでの常識・手法が通用しない、自前主義では答えが見通せない「未知の世界観」に入っており、そこに適応する鍵が「闊達な共創」だと考えています。今や企業においても、SDGsなどを例とした社会課題を起点としないと事業化できないところまできています。同時に、新しい意識の先端にいる若者たちの働く意識も、ただ社会の役に立っているかが活力になり、企業の活力につながっています。未知の社会課題は、一企業だけでは応えきれぬものではなく、枠を越えた多様な人・企業の力が集結して「共創関係」が広がってこそ実現の可能性が拓けていきます。

人類は、近代（工業生産）の画一化、効率第一になると、細分化された専門分化に収束し、限られた枠のなかで思考していく。しかしこのことは人類が生来もつ能力を封鎖していきました。原始人類が万物との一体化で自然の摂理を見出したように、百姓が自然との一体化で卒なく生きる術を身に付けたように、人類の本源は「全体を包括し本質を抽出する思考」にあります。近代から次代に踏み出し、狭い枠に閉じ込めた人類の本源を解放し、生来の包括的な全体観の能力を高める。共創の時代とは、未知の世界観との直面で「人類の本源を解放する時代の到来」と言えるのではないのでしょうか。市場が先端的で未知度の高い事業に収束していくに伴い、既存の業界も境界が重なり、再編されていく。だからこそ古い市場の枠を越えた新事業創出、企業の枠を越えた共同研究や技術開発など外部との共創が不可欠となり、人類の本源が可能性になっていく時代です。

今年度、人材を根幹とする共創経営の基盤整備となる「3カ年中期経営計画」を立て、営業戦略、技術戦略、人材戦略の3つの切り口から、全社員が経営戦略づくりに参画し、毎月の経営会議で浸透、実践を続けています。各事業部内の共創、事業部間の共創、社外との共創を闊達にし、常に戦略事業を創出しながらコア事業を高度化するサイクルをつくり「創造競争と協働の共創社会」を牽引していく所存です。そのため、今年度に本社ビルを改修し、共創拠点として整備しました。今後はこの拠点も活かし、社内外の共創を促進し、クライアント、自治体、協働企業、大学などの研究機関、そして地域のみならず次代の社会を創っていく、その共創の要となる企業を目指します。

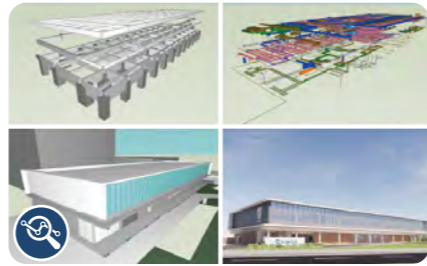
### 共創事業



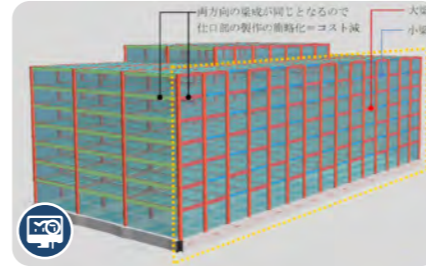
設計事業部 × 教育事業部による「子ども建築塾」



製材の重ね梁による大断面架構の技術開発



BIMによる設計～運用一貫システムの検証



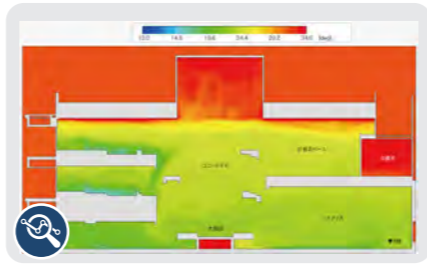
新しい構造架構計画の技術開発



ワークショップでの一体追求の場づくり



学会やシンポジウムでの技術交流



環境シミュレーションと実測による検証と研究



類ビルにて協働企業との技術交流会



# ものづくりに関わる 創作実証実験の場「工房」

# 4F

天井や床や壁にあえて建築的な仕上げをしていない「スケルトン空間」は、ゼロから自分たちで創り上げる場です。汚れを気にすることなく活動に没頭でき、創作・開発・検証、教育まで、ものづくりに関わるさまざまな活動を実施できるスペース。DIYや模型製作などの実践学習をはじめ建材メーカーとの商品開発、壁の塗装や天井の施工など、使い方に制限のない「何でもできる空間」となっています。

また、同時に建物の仕組みに五感で触れることができる教材としての役割も担っています。



4階はスケルトン空間に加えて、調光・調色機能のある照明の採用、および配線ダクトレールによる自在な機器レイアウトが可能な設計としています。建築設備に関わるみなさまとともに、新製品モニターの実施や、空気・光環境の実証実験ブースの設置、モックアップの運用実験など、机上検討だけでなく身体感覚で「環境」を考えていきます！

# 3F 子どもたちがのびのび 学ぶ類学舎・共同保育室



設計室設備メンバー

# 5F&6F 全事業部の社員が働く、新しい働き方を考える オフィスフロア

# ものごとの本質から未来までを議論する「劇場会議室」と「サロン」

# 7F

最大350人が一堂に介する「劇場型会議室」は参加者全員が顔を合わせながら議論ができる円環状の座席レイアウトになっています。遠隔モニターや個人マイクを搭載しており、参加者全員の思いや意見を反映しながら新しいアイデアを生み出す場として活用しています。



7階はサロンの改修とDX設備の拡充によって、劇場会議室と合わせてさまざまな人数規模のイベントや会議に対応可能な空間となりました。建設業界に関わる企業・大学などの関係者のシンポジウムや講演会はもちろん、設計を志す学生、若者たちにも積極的に活用していただき、社会の未来をみなさんと議論できるような場にしていきます！



設計室意匠メンバー



# 新たなプロジェクトやアイデアを生み出す「共創拠点」 新生 類ビル



# 多彩なイベント開催や打ち合わせに対応する「共創ホール」

# 2F

来訪者を出迎えるエントランスに隣接し、約200㎡の広いホールを設置。少人数の打ち合わせから最大100人規模のイベントに対応するスペースとなっています。活動内容に合わせて家具・機器を柔軟に変更でき、参加者同士の活発な議論を促す開放的なインテリアとしています。

日常の打ち合わせから、120インチのスクリーンやモニターを活用した合同勉強会、展示会など、イベント会場としても利用できます。同じ空間に企業や業種の枠を越えたさまざまなイベントが開催されることで、新しいつながりを生み出していきたいと考えています。ここで何ができるか、可能性は無限です！みなさまと共創を楽しみにしております。

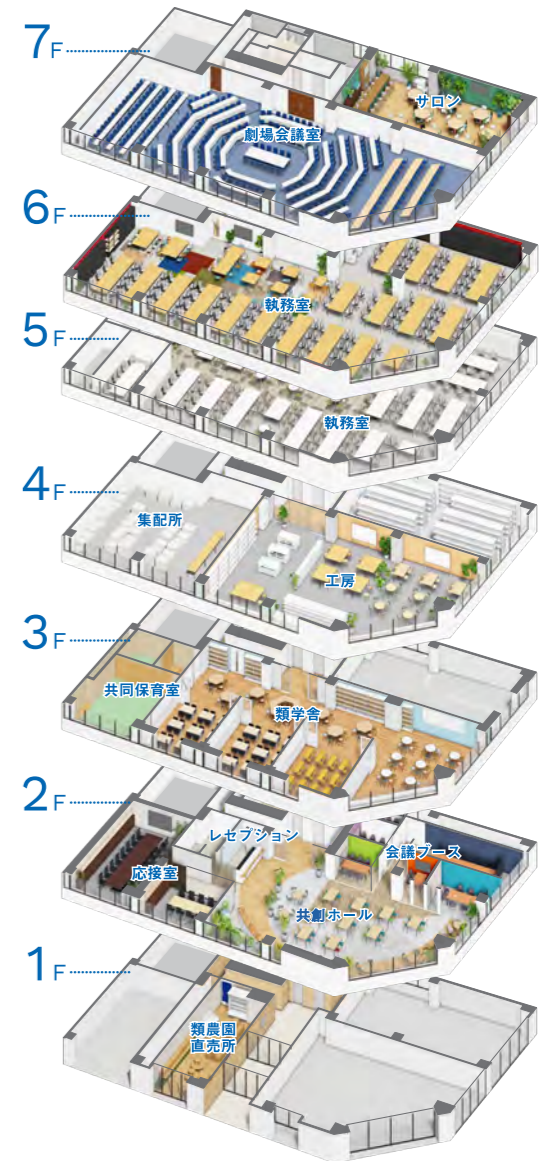


本社秘書メンバー（共創コーディネーター）



# 農村と都市を繋ぐ 類農園直売所

# 1F



# 地域の気候・風土を見える化する環境デザイン



滋賀県東北部工業技術センター外観パース。大開口は地域産材を活用したCLTの研修室。外装の金属ルーバーはピッチ・厚みでリズムをつけて、琵琶湖のさざ波を表現するデザインを検討中

**シミュレーションを重ねて建築と環境を統合する**

れてきた歴史的な背景がありま  
す。環境建築とは単に省エネル  
ギーという視点ではなく、我々  
のDNAの中にある歴史的、文化  
的な背景をも包括して考えること  
が必要ではないかと思えます。  
**土屋** 集落の成り立ちから、地域  
性を読み解き、環境デザインに反  
映していくプロセスを設計の型に  
していけると思いますが、すごく  
刺激的な過程でした。  
**金子** 単なる現地調査だけでは、  
具体的な成果になりません。でも  
その形ないもの・見えないものを  
見つけることも建築家の職能のひ  
とつなではないかと思っています。  
形のないものをいかに形にし  
ていくか。そしてその先にまた形  
のないものを生み出していく。こ  
れはどういうことかという、建  
築の形が促す人々の行為とか行  
動って形のないものですよ。私  
は今回類さんとの共創で、その設  
計スタンスに触れて気づいたこ  
とでもあります。

**小熊** 地域資源をどのように新  
しい価値に転換させていくかとい  
うところに重きがありそうですね。  
ね。今回の特徴的な取り組みとし  
て「湖風」の活用がありました。  
その過程では金子研究室のシミュ  
レーションによって、設計内容が  
塗り重なっていくスピード感が頼  
り組んできました。

**小熊** 今回、滋賀県湖北・湖東  
地域に点在する複数の集落調査  
に同行し、建築群や形・素材な  
どが地域性を表していることを  
感じるとともに、それらをいか  
に再現していくかということが  
、設計者の役割だと感じまし  
た。

**金子** 例えば建築をつくらない  
方が環境に負荷がかからないと  
いう極論もありますが、建築が  
できた後の方がその場所の環  
境、特徴や「良さ」をより感じ  
られれば、建築を作る意義があ  
ると思えます。もともと建築は  
その場所の素材でその場所の文  
化や気候・風土を捉えてつくら



写真左から類設計室設備設計部・土屋範明課長、金子尚志氏、類設計室意匠設計部・小熊耕平課長

# 共創対談

## 滋賀県東北部工業技術センター

「滋賀県をイノベーションの聖地へ」のスローガンのもと、整備が進められている研究開発拠点。この施設のコンセプトの柱として環境提案を行うに当たり、地元・滋賀県立大学の金子研究室と協働しました。地域性を読み解く現地調査の重要性を踏まえ、研究室を率いる金子尚志教授とともに改めてこれからの環境建築、環境デザインの在り方を考察しました。

### 形ないもの・見えないものをいかに捉えるか



金子 尚志氏  
(かねこ・なおし)

滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科教授  
ESTEC and Partners 主宰

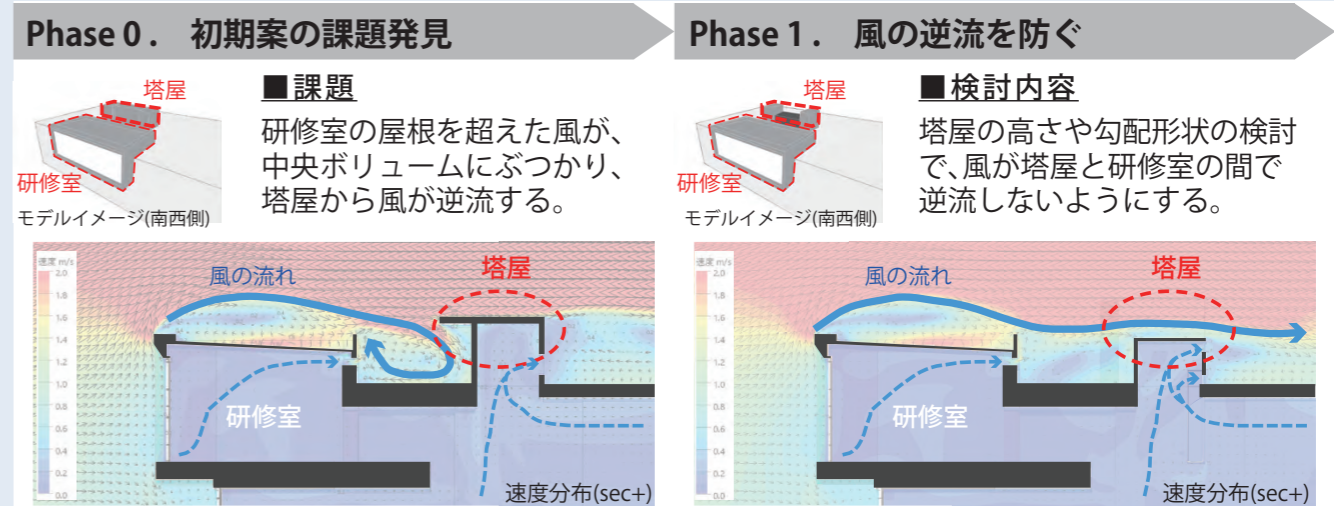
**小熊** 環境といえば今や「ZEB」は大前提ですが、そういった指標を越えて自然環境をどう把握するか、その土地特有の心地よさをいかに理論化するの  
か、何を切り口に環境提案の質を高められるか、未知なる課題が多いと感じています。  
**金子** どれだけの地域の環境を拾い上げられるか、未知度は高いと私も感じています。そういう中で我々にできることは、設計プロセスの中で丁寧に気候・風土を読み解き、どのように建築に落とし込んでいくかを常に意識すること。今回のプロジェクトでは、その必要性を考  
えながら環境というテーマに取

**Phase 0. 初期案の課題発見**

**■課題**  
研修室の屋根を超えた風が、中央ボリュームにぶつかり、塔屋から風が逆流する。

**Phase 1. 風の逆流を防ぐ**

**■検討内容**  
塔屋の高さや勾配形状の検討で、風が塔屋と研修室の間で逆流しないようにする。



## 製材を活用した 大規模木造建築の設計

### 京都市立栄桜小中学校

今、社会では環境に配慮した建築として木造建築、さらには地域の製材を利用する「地産地消型」の建物への注目が高まっています。そうした木造建築の可能性や今後の展望について、京都市立栄桜小中学校の設計をはじめ類設計室と協働関係にあり、産学それぞれの木造建築の第一人者でもある九州大学大学院・佐藤利昭准教授、桜設計集団構造設計室・佐藤孝浩代表とともに話し合いました。

### 木造に高まる社会期待

**廣重** 弊社が設計した京都市立栄桜小中学校は、地元自治体が増やそうとしていました。さらに地産地消、京都の製材で何かしようという流れが強くなる中で、製材を使った学校をつくるという条件で受注しました。学校建築はスパンが長いので、製材を重ね梁にして設計したわけですが、何を根拠に設計するのかが、単に学会の基準やメーカーの定数を使用するだけで良いのかという思いが避けられませんでした。それで、佐藤利昭先生と佐藤孝浩さんに相談をさせてもらいながら、実験もさせてもらったという経緯があります。

**佐藤(利)** 木造業界では実験的な評価が先行するというのだと思います。そもそも解析学全般がいわゆる金属材料を対象にしている、それを木造に当てはめたときに説明できないことが多いです。コンクリートと違って木は建築材料として研究されなかった時代もあって、基礎研究がかなり不足していることもあります。

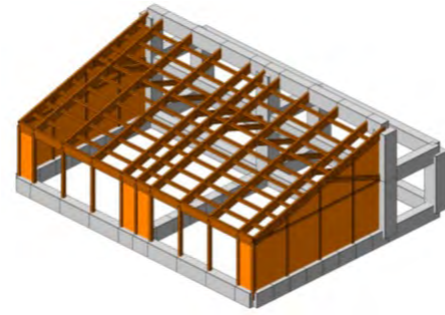
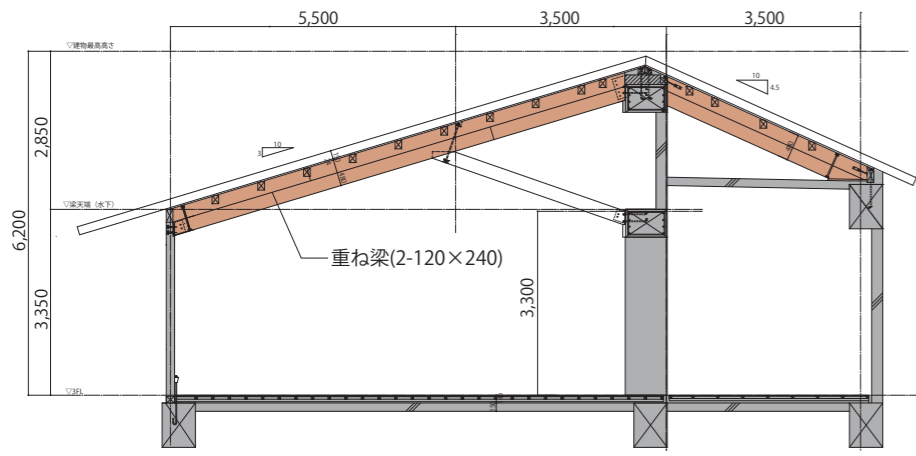
**佐藤(孝)** 私が設計した下馬の集合住宅では、外壁を斜材で構成し、弱点となる床との接合部

をコの字型の金物で接合しました。このときも接合部の実験を行い、安全性を確認して設計を進めました。高知県自治会館では、免震と組み合わせることで、木材としてのばらつきの影響を小さくすることで、木材の解析と実態を近づける設計も行いました。当時、告示になかったCLT耐力壁を実験により破壊性状態を把握し、設計に反映させました。中大規模になればこういった解析と実験により、設計を進める必要があると思います。

**廣重** 社会的には超高層や大規模の木造が出てきていて、高さも広さも大きくなっていく傾向があります。そうすると実験検証だけでは済まない気がします。

**佐藤(利)** そのとおりで、超高層の設計を経験している研究者はほとんどいないはずなんです。それで木造の超高層を建てようとしているのはかなり少ない。評価する側も含めてそれぞれのノウハウがないという問題はかなりある気はしています。

**廣重** 私は類設計室に入ってから設計を行えば安全である、と思った時期もありました。ですから、阪神・淡路大震災で多くの建物



京都市立栄桜小中学校で用いた重ね梁



佐藤利昭研究室(実験)、シネジック(ビス製造)、豊工務店(木材調達)の協力のもと、垂直打ちと斜め打ちの比較検討、およびビスと木材の破壊性状と抵抗メカニズムを明らかにした



実験により破断された重ね梁の内部



**佐藤 利昭 氏**

(さとう・としあき)

九州大学大学院准教授、  
東京理科大学客員准教授、  
防災科学技術研究所客員研究員

**佐藤 孝浩 氏**

(さとう・たかひろ)

株式会社桜設計集団構造設計室  
代表取締役、  
高知県立林業大学校主催木造塾  
講師



### 木造の耐震安全性確保

崩壊したのは衝撃でした。計算が正しいわけじゃなくて自然の中で壊れたりする方が正しいということ、基準を守ればいいという世界じゃないと実感しました。

**佐藤(孝)** 私は大学生のときから木造をやっている、鉄やコンクリートは1+1は2が成立するだろうなと思っていました。でも木造の場合それが1を割り込んだり、3や4になったりする可能性もあります。現実的に木造の数値解析をして実際に実験をすると、結果はまあまあ合う、びったりじゃなくて「まあまあ」ぐらいの話なんです。だから式に当てはめるだけでは答えが一致しない可能性があることに意識しています。逆にそこには経験値的な判断が必要とされると思っていて、それが木造をやるおもしろさでもあります。

**佐藤(利)** RC造とかS造が今成立しているのは、過去に多大な被害を経験してきたからです。そこでさまざまな問題が明らかになって、そこに対策が講じられてきたわけです。大きい木造の被害をまだ見たことがないという不安は、ほぼ全員が思っているんじゃないかと思います。大きい木造が果たしてどう壊れるのか気になるし、だからこそ強くつくりたいと思いませんか。

**廣重** まだまだ未解明な

ことが多い中で、解析だけでなく実験や検証をどう繋げていくかというところだと思っています。社会的に木造の高層化や中大規模を広げていくには研究者や設計者、施工者も一致団結しないといけない。設計者としてその紐帯になる必要があると感じました。



高知県自治会館・CLT 実験



類設計室大阪事務所のメンバーとリモートでつなぎ、画面共有しながら進行。写真左から佐藤孝浩氏、佐藤利昭氏、類設計室構造設計部・廣重圭一部長、同・石井卓磨



京都市立栄桜小中学校外観パース

## 学びの多様化に対応した 類似事例

### 脱・教室で創る、生徒主体の学びに応じて 変化できる空間



追手門学院中・高等学校

生徒主体の学びである「リフレクション型授業+3つの学び（個別・協働・プロジェクト型）」に対応した「学習環境一体型」の新校舎を設計。教室や廊下といった概念を取り払い、校舎全てを学びの空間と位置づけ、「新たな学び」に応じて建具や家具を動かすことにより教室の形を自在にアレンジ。固定的な図書室は設けずに、各所に図書を分散配置し生徒の学びにすぐ活用できるようにしている。

### 生きる目的が明確になるビジョンスクール



類学舎

類学舎は、子どもたちが「何のために学ぶのか」「何を学ぶのか」に向き合い、生きる目的が明確になる“ビジョンスクール”です。プログラムは、体を強くする「外遊び」、効率よく学ぶ「学習」、未知課題を追求する「探求」、インターンシップを含む「仕事」を用意し、活力のある人になるよう育みます。大人になれば「体が丈夫であること、学ぶこと、働くこと、これらは全てつながっている」と分かります。類学舎の生徒はそれを子どものころから実感し成長します。

## 共創対談

### 大田区立不登校特例校

現在、類設計室では大田区立不登校特例校設置事業構想および基本計画案作成の業務を行っています。「学びの多様性」が社会的に認知される中、「そもそも学校に行きたくない」「学校に行く理由が見当たらない」と言う子どもたちを前に“学ぶ場所をどうするか”ということ自体が揺れ動く時代の学校建築、学校空間のあり方を、長澤悟・東洋大学名誉教授、野田正人・立命館大学名誉教授をお迎えして考えました。



野田 正人 氏

(のだ・まさと)

立命館大学大学院応用人間科学研究科特別任用教授、立命館大学名誉教授。専門は刑事法学、社会学、社会福祉学、教育心理学、臨床心理学。国や自治体において子どもの福祉を中心にスーパーバイザーや委員を務める。

「行きたくなる」  
施設と動機をセットで考える

野田 不登校は終戦直後からありました。理由や事象は時代とともに変遷しましたが、現在大きな要因と見られているのが、不登校児の約4割が「学習についていけない」ということです。ですから不登校対策を考える際「学びを保証できているか」という問題は大きいと思います。長澤 すべての子どもたちにとって学校がどういう場、どういう空間を備えたものでありたいか。昨年3月に文部科学省から出た報告書のキーワードの一つは「明日また行きたい学校」です。と同時に、報告書には書かれていませんが「明日また友だちに会える場所」、これが学校としてありたい姿だと思えます。また、報告書には「誰一人取り残さない教育」という言葉もあり、この三つのキーワードを軸に学校空間をもう一度捉え直す必要がある。

長澤 「わくわく」がキーワードだと思えます。今の学校は「特別教室のあり方」が非常に大きな課題で、本来わくわくがたかなある活動の場なのに、設計者の意識からそれが抜けている。本来の目的である主体的で創造的な学びの場、センス・オブ・ワンダーを持ち続けてさまざまな発見ができる場所として特別教室を捉え直すとは全然違う学校ができると思います。もう一つは「私の場所」。例えば、北欧の学校のように至る所にいろんな色、形、大きさの

ソファがあり、子どもたちが自由に選べる。これは自分の居場所の選択肢が多くあるということだと感じます。一方、日本の学校は自分の教室の自分の席以外に座る場所がない。すると教室に入れない子には居場所がないんです。そんな子の居場所、それがソファではないかと感じました。不登校の子が示す行動や状況は、学校を捉え直す上でたくさん示唆を与えてくれます。岩井 社会的にデジタルやAIの進歩は不可避ですが、だからこそプリミティブな価値や意識というものにみんな敏感になっているように思います。今先生



後列左から類設計室東京設計室・岩井裕介室長、同計画設計部・八橋夏菜、同意匠設計部・森浩平

た場所で活動する重要性を認識しました。岩井 設計する者から見れば、子どもたちの心の機微や状況をより緻密に知っておく必要がある。また、校内に私の場所やわくわくを作るには、デザイン、ファシリテイ、光、音、空調など、環境作りの工夫が必要で、それには当事者である子どもたち、学校関係者、専門家の方々の共創関係が不可欠です。いまの子どもたちに必要な学びの場はどのように作っていくものではないでしょうか。

「わくわく」と「居場所」を  
どう作るか



長澤 悟 氏

(ながさわ・さとる)

教育環境研究所所長、東洋大学名誉教授。工学博士。専門は建築計画学。教職員と教育施設、地域住民と学校地域の関わりについて話を重ねる学校づくりに全国各地で携わる。



類設計室教育事業部・馬場則光がリモート参加



1階エントランスホール

## AGC 横浜テクニカルセンター SE1・SE2



外観

建築主：AGC 所在地：神奈川県横浜市鶴見区  
構造・規模：〈SE1〉鉄骨造・地下1階 地上4階・延床面積 44,883.21㎡  
〈SE2〉鉄骨造・地上5階・延床面積 3,076.92㎡ (改修面積)  
竣工：〈SE1〉2020年、〈SE2〉2021年 施工：〈SE1〉フジタ、〈SE2〉松尾工務店  
共同設計：〈SE1〉基本設計：類設計室、実施設計：フジタ  
〈SE2〉基本設計・実施設計：類設計室

AGCの最新研究開発棟SE1・SE2は、横浜市神奈川区羽沢の中央研究所と、鶴見区の旧京浜工場を統合した新たな研究開発拠点「AGC横浜テクニカルセンター（YTC）」の中核施設。これまでの中央研究所モデルは、基礎研究から製造までを自社の各部門で完結することがほとんどだったが、革新的技術の創造と開発スピードが求められる社会で、内外の「協創」を核とした研究体制に転換した。そのため、社会から隔離されていた研究所を大胆に開くとともに、新技術の開発空間を、クライアントや外部研究者、社員の目に触れるオープンエリアに配置し、変異を生み出すことを意図した。デザインコンセプトは「Future Factory Lab」。試行錯誤で挑戦してきたAGCの「ものづくりの熱量」を継承するとともに「AGCの次をつくる」未来感のある空間を目指している。美しく整った清らかな研究所よりも、ファクトリーのような荒々しい空間がその答え。国内最大級のガラスで構成された外観は、AGCの熱量を来訪者に発信するとともに、変貌する京浜工業地帯のオープンイノベーションの象徴となる。

## Shimadzu Tokyo Innovation Plaza



吹き抜け部分の内観

建築主：島津製作所  
所在地：神奈川県川崎市川崎区  
構造・規模：鉄骨造・地上4階・延床面積 9,503.50㎡  
竣工：2022年  
施工：大和ハウス工業  
共同設計：  
〈A工事設計・施工〉：大和ハウス工業  
〈C工事 プロジェクトマネジメント/全体設計・監理〉：類設計室  
〈C工事実験設備設計・施工〉：島津理化  
〈C工事施工〉：太平工業  
〈C工事展示設計・施工〉：丹青社  
〈C工事サインデザイン〉：丹青社・6D

当施設は、島津製作所の分析計測機器の新たな用途開発や、国際的な学会やセミナーを招聘することで、新たな知の創造・交流空間を目指す拠点となっている。来訪者に分析機器を、そして働く社員を「魅せる」というコンセプトのもと、大きな吹き抜けを囲むように展示エリア、ラボ、オフィス、ホールを配し、最上階には地球を模した球体 Globe を設置。ラボやオフィスをすべてガラス張りにし、吹き抜けをめぐる屋内階段で各階をつなぐ開放的な空間を生み出した。

## リョービ株式会社 本社新館

「挑戦を楽しみ、世界へ魅せる価値創造拠点」をコンセプトに、各事業部門および本社部門が入居する本社ビル計画。46.8m x 18mの無柱の「ワンルームオフィス」を配し、建物中央部の階段で結ぶことで社員の一体感やコラボレーションを促す計画とした。地域に根ざした環境配慮型オフィスビルとするため、ZEB Ready 認証の取得を予定している。また自然エネルギーとして井水を活用し、カーボンニュートラルにも寄与する計画としている。



外観イメージパース

建築主：リョービ（株）  
所在地：広島県府中市  
構造・規模：地上3階・鉄筋コンクリート造・延床面積 5,300.46㎡  
竣工：2024年（予定）  
施工：戸田建設

## 先端事業を拓く 創造拠点

21世紀の先端市場を先導するクライアントの戦略パートナーとなって協働し、エネルギー・情報・半導体・医療バイオ・素材などの先端事業を支える創造空間づくりに取り組んでいます。

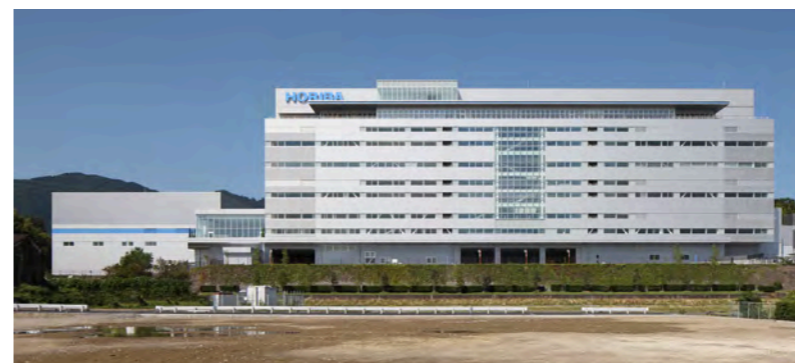
研究・開発施設の実現一覧はコチラ



## HORIBA BIWAKO E-HARBOR

日経ニューオフィス賞 近畿ニューオフィス推進賞 (2016)

『おもしろおかしく』は、人生の一番良い時期を過ごす「会社での日常」をエキサイティングなものにという創業者の堀場雅夫氏の哲学。この哲学の下で、高い技術を世界に発信する港をイメージして本施設の設計がスタートした。60年にわたって培ってきた技術の発信拠点づくりと、未来を担う人材育成を同時に実現する『技術の遷宮』がプロジェクトのビジョンとして定められた。若手メンバー中心の堀場製作所チームと弊社の設計チームが一体となって、未来の生産施設をどう再編するのか、専門領域を超え議論を重ねて、世界での競争力をさらに高める新しい施設を実現した。琵琶湖を臨む雄大なファサードは、高い技術力から生み出される計測機器の繊細さを表現している。7層の吹き抜けをつないだスカイアトリウムは、雄大な自然の前に、「人と人」「人と自然」が共感しながら五感をフルに働かせ、知識を知恵に変える空間として、研究開発・生産の高度化を支えていく。



外観

建築主：堀場製作所 所在地：滋賀県大津市  
構造・規模：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造・地上10階・延床面積 27,338.24㎡  
竣工：2015年 施工：大林組



スカイアトリウムの吹き抜け

## タカラバイオ 本社・研究棟



外観

建築主：タカラバイオ 所在地：滋賀県草津市 構造・規模：鉄骨造・地上4階・延床面積 17,168.74㎡ 竣工：2015年 施工：大林組

大津、草津、三重、桶に分散していた本社・研究・生産機能を現在の草津の敷地に集約し、新本社・研究施設を整備するとともに、日本初のCGCP施設の建設をCMとして支援した。同時に、革新的なバイオ技術で新市場を切り拓くタカラバイオの経営・事業戦略を実現するために、将来構想も見据えた段階的な整備計画を具体化したマスタープランを策定。その後もCGCP施設や本社機能の増設など成長・変化し続けるタカラバイオの経営・事業構想に沿った施設戦略を一体的に支援している。



外観イメージパース

### 関西学院大学 KSC Innovation Field (仮称)

本施設は、学生寮とフィットネスジムを併設するインキュベーション施設であり、起業を志す学生や教員、地域の方々の活動を支援する、社会に開かれた拠点を目指すプロジェクトだ。上記コンセプトを体現すべく、プロジェクト推進も多様な関係者を巻き込みながら推進する「共創型」を実践中。学生寮では、主役となる学生とのワークショップで「学生寮でどのような生活をしたいか。どんな活動ができるか」を議論し、それらを建築計画に反映。施設は屋内外でつながり、多様な活動がどこでも、いつでも行える構成とした。

インキュベーション施設では、関係者のみなさまと共にコンセプトから運営計画まで創り上げるとともに、2024年には学生が地域へ飛び出し、多方面で活躍する方々と連携してWSを開催する予定。前面に広がるフロントパークは、誰もが気軽に訪れ、イベントも開催できる、地域の庭のような空間をイメージして計画している。

学生たちが仲間と研鑽し、第一線で活躍する起業家たちからの触発を通じて、社会に新たな価値を生み出す人材へと成長していく拠点となることを願っている。

インキュベーション施設内観



建築主：学校法人 関西学院  
所在地：兵庫県三田市学園4丁目2番  
構造・規模：鉄筋コンクリート造および鉄骨造  
地上4階・延床面積約10,900㎡  
竣工：2025年春(予定)  
施工：大林組

学生ワークショップの様子

### 葛飾区立水元小学校



外観イメージパース

建築主：葛飾区 所在地：東京都葛飾区  
構造・規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・地上3階・延床面積8,105.75㎡  
竣工：2025年(予定) 施工：金子・田辺建設共同企業体

「のびやかに活力ひろがる心と学びの拠り所」をコンセプトに、上層をセットバックさせて段丘状に広がる建物形態とし、立体的に広がる緑、鑑下見板張り、天然の貝や砂を用いた外装材により、都内では珍しい自然豊かな環境への一体感を図った。

機械の力に頼らない防暑・防寒対策を目指し、開口部や屋根、バルコニーなど日射負荷制御、断熱性・調湿性に優れた木・土を積極活用。段階的に熱を逃がし、子どもたちの適応能力を育む温熱環境づくりに配慮している。

### 追手門学院大学 総持寺キャンパスⅡ期計画

新校舎は、大教室・研究室を千鳥型に配置することによって生まれる、雁行しながらつながる共用部を「インノベーションLAB」として計画し、教室や研究室と連携して活用できる。インノベーションLABでは、専門分野を越えた学び合いが広がり、新たなアイデアが生まれるよう、体を動かせるスペースやカフェスペースなども学習空間と一体的に計画した。外観は、色彩や配置に動きを持たせた躍動感あるバルコニーのデザインとし、内部の活気が外部にも表出するデザインとした。



外観イメージパース

建築主：学校法人追手門学院  
所在地：大阪府茨木市  
構造・規模：鉄骨造・地上6階・延床面積44,856.18㎡  
竣工：2024年(予定)  
施工：奥村組  
共同設計：〈基本設計・実施設計監修〉類設計室 〈実施設計〉奥村組

## 共創 PROJECT 教育×類設計室

### 地域・世界と繋がる 人材育成の場

主体的に行動し考える人材へと成長する拠点を旨し、多様な人々との交流・協働を生み出す自由闊達な学びの場づくりに取り組んでいます。

教育・研究施設の実現一覧はコチラ



### 旧羽田旭小学校敷地活用事業



建築主：ミサワホーム株式会社  
所在地：東京都大田区羽田旭町7-1  
構造・規模：未定  
竣工：2027年(予定)  
〈代表企業〉ミサワホーム株式会社  
〈協力企業〉株式会社松村組、株式会社類設計室、株式会社トヨタエンタプライズ、東急住宅リース株式会社、プライム ライフ テクノロジーズ株式会社

地元大田区で区内ものづくり事業者をはじめ国内外の製造事業者・スタートアップ企業・大学などの共創を加速する類設計室東京本社との取り組みを象徴する事業でもある。今後も事業者コンソーシアムとともに、日本の産業を発展させていく区のものづくり産業のさらなる成長を導く拠点づくりを推進していく。

本事業の事業者コンソーシアム(代表企業ミサワホーム)において、施設設計・監理担当として同プロポーザルに参画し、「つくる」と暮らすを一体に、「を」をコンセプトに、区内産業の持続的発展・取引拡大やコミュニティの活性化、防災拠点機能の強化につながる提案を行った。その結果、これらの提案が評価され、当提案チームが同事業の整備・運営等を行う事業者として選ばれ、事業契約の締結に至った。

当事業は、区内産業の持続的発展・取引拡大の拠点となる「インノベーションファクトリー」、町工場の建替促進、国内外の技能実習等に活用する「リビングスタジオ」、さらに体育室や集会室、コミュニケーションスペース等を備えた地域交流拠点(仮称)コミュニティセンター「羽田旭」を整備する計画。事業全体として2027年度の完成を予定している。

### こども建築塾・自然学舎 (教育事業部との共創事業)

自然学舎・第17回キッズデザイン賞(2023)



こども建築塾



自然学舎

「こども建築塾」では、本格的な設計を学ぶことを通じて、ものづくりの楽しさを体感し、社会に出ても役立つデザイン思考を身につけることができる場を提供する。第一線で活躍する現役の一級建築士が講師をつとめる。また「自然学舎」では、自社所有林や農場の恵まれた大自然を教室にした自然体験活動を展開している。奈良や三重の自社農場では、有機農業にも携わる。小学生から中学生が自らの手で実践を繰り返し「将来に生きる力」を育む。



# 地域みんなが主役となるまちづくり拠点

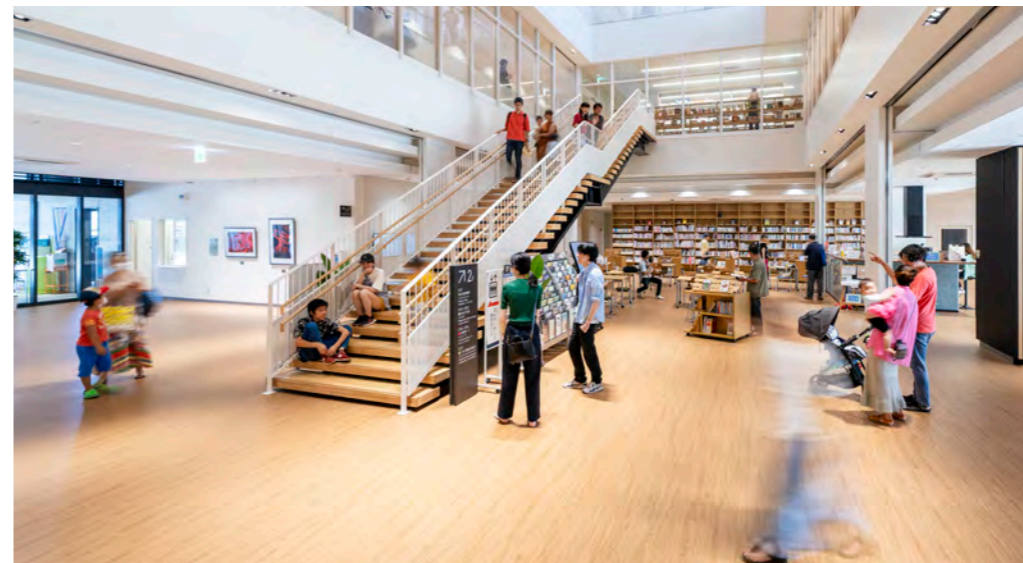
地域の方々とともに街の未来について対話を重ね、その想いが結実した建物をつくることで、地域の方たちの新たな活動の拠点となることを目指しています。

実現一覧はコチラ



## 豊中市立庄内さくら学園・豊中市庄内コラボセンター

2023年度グッドデザイン賞(2023)



建築主：豊中市  
所在地：大阪府豊中市  
構造・規模：地上4階・鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・延床面積 30,090.64㎡  
竣工：2023年  
施工：大林組・河崎組JV

庄内コラボセンターのエントランスホール

内観

## 本の森ちゅうおう (中央区立京橋図書館・中央区立郷土資料館)

2023年度グッドデザイン賞(2023)



建築主：中央区 所在地：東京都中央区  
構造・規模：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造・地下1階地上6階・延床面積 8,881.63㎡  
竣工：2022年 施工：松井・坪井・クリスタルジャパンJV



外観

「本の森ちゅうおう」は、東京都中央区の中央図書館を中心に郷土資料館、生涯学習機能、カフェなどを備えた文化複合施設である。大都市の真ん中で、歴史・文化に親しみながら森を感じる場、世界から人を呼び込む「知の森」となることを意図した。外部は地面から屋上まで立体的な緑が連なり、「森林生態系の摂理」を範としてデザインしている。無数の生命が織りなす生態系のようになり、人が集い、新しいつながりやワクワク感、創造的な活動が生まれる場所を生み出したいと考え、森の特徴として3つの要素を抽出し計画した。

- ①非完結：機能で完結するのではなく、図書館、郷土資料館、生涯学習の場が重なり合う空間を配置する。
- ②多様性：内外に、老若男女それぞれが親しめる、お気に入りとなる特色ある場を点在させる。
- ③触発性：各ゾーンが相互に影響し合う空間構成とする。特に北側の森に面した不連続な階段が偶発性をもたらす。人々の未知への探求心と創造性を喚起する立体回遊型の新しい図書館のモデルを考えた。

## (仮称) 大阪市淀川区十三東計画



建築主：阪急阪神不動産  
所在地：大阪府大阪市淀川区  
構造・規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 地下1階地上39階・延床面積 84,490.71㎡  
竣工：2026年(予定)  
施工：鹿島・高松共同企業体  
共同設計：(全体設計)KAJIMA DESIGN (図書館・保育施設・外構意匠設計)類設計室



外観イメージバース

阪急電鉄の3線、将来的にさらに3線が加わり、京阪神の要として存在感を高めていく十三エリア。本計画は、駅に近接する元淀川区役所跡地と民間用地を活用した一体開発事業で、新たなランドマーク施設を整備する。地域の方が気軽に憩える公開空地を入口に、市立図書館と学校図書館が一体となった「交流型ワイガヤ図書館」と、商業・保育施設・学校施設・集合住宅の複合施設とし、多世代・子育て層が集う新たな地域コミュニティを生み出す拠点を計画した。

## かみなか農楽舎(就農定住研修事業)

全国優良経営体表彰 担い手づくり 農林水産大臣賞(2018)ほか



建築主：上中町(現：若狭町)  
所在地：福井県三方上中郡若狭町  
構造・規模：木造・地上2階・延床面積 838㎡  
竣工：2002年  
施工：(建築)河合工務店 (空調・衛生)武田設備 (電気)井ノ口電気工事店

かみなか農楽舎は2002年に設立された「就農定住研修」事業を核とした農村活性化拠点だ。研修生らはコミュニティ施設で共同生活し、地域に溶け込む生活を体験。卒業後の定住や独立も、若狭町とかみなか農楽舎がサポートし、2023年春時点の卒業生は52名、そのうち卒業生28名(25世帯)、計83名が若狭町に家族とともに定住している。地方創生が求められている今、本事業は22年前に全国に先駆けて、日本の農の課題解決を目指したリーディングプロジェクトである。



地域ワークショップの様子

本事業の目的である豊中市南部地域の活力あるまちづくりを推進するに当たっては、今この地域に残る人と人とのつながりを活かし、子どもから大人まで多様な関係の中で子どもたちを育むことを主眼に設計した。学校機能と公共施設機能の2つの建物をつなぐことで、学校と地域の相互交流、機能連携を高める計画を提案した。そして両建物の真ん中に、地域の生活動線となる「あいさつロード」を設け、地域の方々子どもたちが日常的に交流できる計画とした。あいさつロードには、両建物のエントランスを対面させ、2階はデッキで両建物をつなぎ、さらに世代交流が期待できる両建物の機能をあいさつロードに面して配置することで、多様な交流が生まれるよう工夫している。外観デザインは、南部地域の街が持つ界隈感ある景観を大切にするのが地域に親しまれる建物になると考えた。多様な世代が交流する場所を「舞台」と位置付け、その舞台があいさつロードを中心に、平面的にも立体的にも相互に重なり広がっていくデザインとしている。

## Suita サステイナブル・スマートタウン (Suita SST)

第39回「都市公園等コンクール」一般社団法人日本公園緑地協会会長賞(2023)



建築主：パナソニックホームズ・J R西日本不動産開発・中銀インテグレーション(シニア分譲のみ)  
所在地：大阪府吹田市  
構造・規模：(複合商業施設)鉄骨造一部鉄筋コンクリート造・地上4階・延床面積 22,713.61㎡ (ファミリー向け分譲マンション)鉄筋コンクリート造・地上8階・延床面積 8,987.95㎡ (シニア向け分譲マンション)鉄筋コンクリート造・地上8階・延床面積 9,703.23㎡ (単身者共同住宅)鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・地上6階・延床面積 2,299.44㎡ (ウェルネス複合施設)鉄筋コンクリート造・地上7階・延床面積 5,204.25㎡  
竣工：2021年  
施工：(複合商業施設・交流公園)建築)松村組(空調・衛生)クリマテック(電気)西部電気建設  
共同設計：(全体デザイン監修・複合商業施設・交流公園)類設計室 (ファミリー分譲・シニア分譲・単身者共同)IAO竹田設計(ウェルネス複合施設)シスケア



外観

開発公園として事業者が市に提供する街区公園を中心に、多世代が集い、交流するまちづくりプロジェクト。公園の運営は、複数企業+マンション管理組合で構成された「一般社団法人 Suita SST タウンマネジメント」が担う。民間主導の運営スキームを導入し、マルシェや防災イベントなど多彩な活動を行っている。類設計室もイベント運営に参画し、類農園の食育イベントや旬の野菜マルシェの開催、類塾の吹田SST教室主催のスタンプラリーなど、継続的に関わっている。



### 最適な環境を実現する、環境エンジニアリング

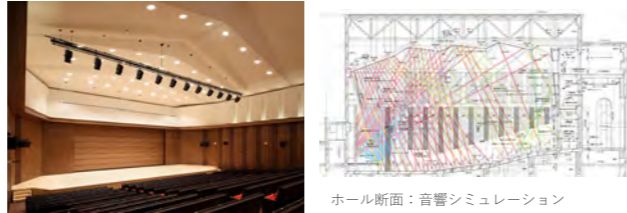
温度ムラのない、健やかな空間をつくる「輻射空調」  
キミカ本館



天井輻射空調システムとコアンダ効果の外調機システムの組み合わせにより、エネルギー消費を削減しながら均質な温湿度環境を実現し、健やかな執務・研究空間を演出した。



音響の専門家を交えたシミュレーション  
大阪成蹊大学 駅前キャンパス



音響の専門家を交えたシミュレーションや、精度の高い BIM モデルで形状を検証し、最適な音環境を実現した。



### 地域産材を活用した中大規模木造の学校建築

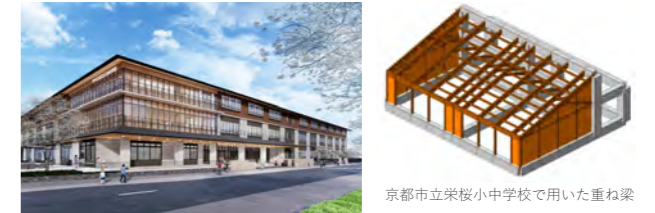
全国 3 例目となる木造 3 階建て小学校  
松田町立松田小学校



全国に普及していく木の学校づくりモデルを目指して、構造は最も標準的な在来軸組工法を採用し、設計は尺貫・矩形モジュールで統一した。



地域産材を活用した木造架構計画  
京都市立栄桜小中学校 (小栗栖中学校区小中一貫校)

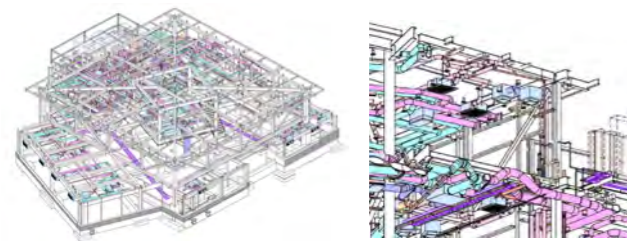


京都府内で培われてきた木材資源や加工技術の活用を目指し、「無垢材(製材)」を使った重ね梁による木架構を提案した。



### 意匠・構造・設備を統合する設計

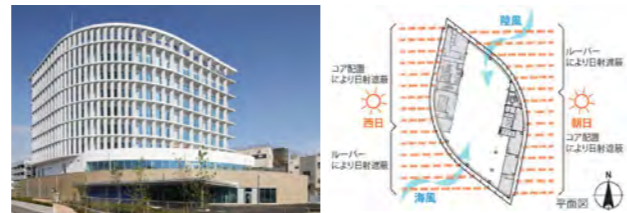
BIMワンモデルの設計システム



意匠・構造・設備の情報をひとつの BIM モデルに集約し、専門領域を横断・統合するシステムを構築。BIMの専門部署を持たずに、設計者自ら BIM システムの構築を追求している。



環境システムとデザインの一体化  
ガリレイグループ本社ビル

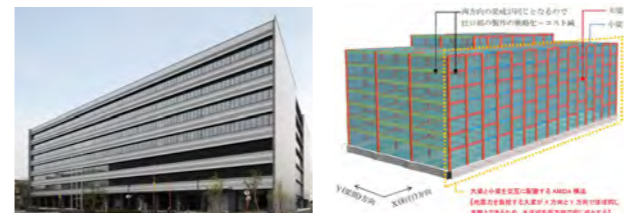


外観デザインとなるフィンを、日射熱負荷を低減させる環境要素として機能させ、ファサードデザインと環境システムを一体化させた。



### 施設特性を活かした新構法の開発

合理性を高めた架構計画「AMIDA 構法」  
京都市上下水道局総合庁舎



大梁と小梁を交互に配置する AMIDA 構法により、X 方向・Y 方向の梁成を揃え、仕口を簡素化し、鉄骨量を減らすことで経済性を高めた。



螺旋スロープをブレースとして活用した高耐震架構  
Suita サスティナブル・スマートタウン (Suita SST)



上から下まで螺旋状に床がつながっている形状をブレースとして活かし、力を螺旋状に地面まで到達させることで地震に抵抗する高耐震架構を実現した。



### 建設業界の技術高度化と人材育成への貢献

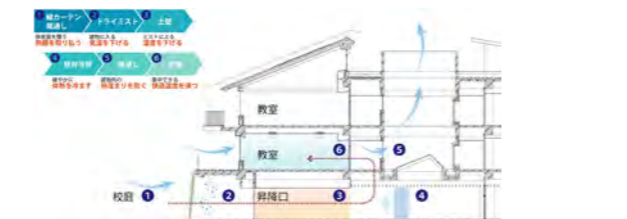
次世代の担い手育成に貢献する特別授業



弊社で設計を手掛けた京都市立京都工芸専門学校の特設授業。実際に設計したプロジェクトの設計過程を「追体験」するプログラムで授業を行い、次世代の担い手育成に貢献した。



「学校建築脱炭素研究会」シンポジウムの共同開催



東京大学・株式会社エネルギーまちづくり社との共同開催。弊社の強みでもある学校建築の省エネ・環境設計の未来を共同者と共に追求した。



### 身体性を高める環境設計

快適な吹き抜けワンルーム空間を実現する熱環境づくり  
西島製作所 新本社工場ビル



社員の一体感を高める吹き抜けワンルーム (スキップフロア) の実現のために、熱負荷低減、空間ごとに最適化を図る設備計画、吹き抜けを活かした自然エネルギーの活用などにより、快適な大空間を実現した。



微気候を生み出し、多様性を許容した環境設計  
本の森ちゅうおう (中央区立京橋図書館・中央区立郷土資料館)



日によってやや暖かい場所や涼しい場所が生まれる、その差をある程度許容することで省エネ運用が可能になり、建物のなかでわずかに気候が違う微気候を生み出した。



活力ある社会をめざして

株式会社 類設計室

